女の居場所

津村節子

海竜社

著者紹介／津村節子（つむら・せつこ）
昭和3年，福井市生まれ。小学4年のとき東京へ転居。学習院短大国文科在学中より小説を書き始める。『玩具』で昭和40年度上半期芥川賞を受賞。著書に，短篇集『玩具』『さい果て』，長篇小説『石の蝶』『炎の舞い』『白百合の崖』，随筆集『みだれ籠』『土と炎の里』など多数。ご主人は作家の吉村昭氏。

女の居場所

昭和六十二年四月二十四日　第一刷発行

著　者　津村節子

発行者　下村のぶ子
発行所　株式会社　海竜社
東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四
電話　東京（〇三）五四二一—九六七一　振替　東京一—四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所　白陽舎印刷工業株式会社（五四）
製本所　大口製本印刷株式会社

定価　一、二〇〇円

© 1987, Setsuko Tsumura, Printed in Japan

ISBN4—7593—0175—5 C0095 ¥1200E

目次

女の居場所

〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
-0002 古金一郎方
S.U.中国へ本を送る会本部
(大阪花甲協会贈書会)
電話06－441－4397
98.11.26

女の居場所

仕事の魅力――8
足の切れ目――19
越前女の信州気質――24
女の歴史――28
父の遺したもの――31
女のあしあと――40
私たちが見失ったもの――44
いのちの重さ――47

女の心ごよみ

着物のいのち――54

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

想い出の雛人形――61
月下美人が咲く夜――65
やきものと風土――69
京のやきもの――73
傘の粋――77
梅干と梅の里――80
祖母の味――83
わが終いの住処――87

旅に結ぶ心

思い出作り――94
郷土の味――101

海辺の村 108
私の風景 111
秋祭 114
真珠誕生 118
長崎の旅 122
墓を訪う 128

優しい出遇い

優しい出遇い 134
沖縄の心を織るひと 143
白秋のふるさと 155
絵島の里 164

やさしい巨人——167
銀座の女——170
愛のかたち
無垢の愛の世界——178
出遇いと別れ——191
人間らしく生きる——213
下町の女の哀惜——217
あとがき——220

ブックデザイン――田中淑恵
装画（型染）――伊藤純夫

女の居場所

仕事の魅力

小説を書くことは出産に似ている

流行作家にはほど遠いが、二十年間小説を書いていると、何を書いたらいいかほとほと思いあぐねることがある。商業雑誌に書く以前は、十五年間同人雑誌に参加していたわけで、その期間を加えれば、長篇を二十篇ほど、短篇は百六十篇ほど書いていることになる。

初めの頃こそ、書きたいことがあり過ぎて、筆が伴わないのがもどかしかったが、職業作家になれば締切や枚数が決められ、必ずしもその時ちょうど書きたいテーマがあるわけではない。

引き受けはしたものの、いくら考えても考えつかず、締切は容赦なく迫ってくる。昼は溜息ばかり、夜は眠れず思わずうなり声をあげるようになる。同じく小説を書いている夫のうなり声で目を覚ますこともあり、こんな場合お互いどうしようもなく、ただじっとし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ているだけだ。

出産予定日を相当日数過ぎた場合、陣痛促進剤を点滴して、人工的に陣痛を起し、出産させることが行われているようだが、点滴で作品が出来たらどんなに助かるかしれない。

だが、今朝たまたま見たテレビでは、こうした医療的必要性からばかりでなく、一年中昼夜を通じてある出産を、ウイークデイの日中に出産させるために計画的に促進剤が用いられていることを知った。これを積極的に取り入れている医師は、出産というものは順調な経過をたどっていても思いがけない突発的な危険状態におちいることがあり、そのためにはベテランのスタッフが揃っている時間帯に産ませるのが安全だ、という考えをのべていた。

が、促進剤が適量でなかったり、使用中の観察が行き届かなかったりして子宮が破裂し、産婦が死亡したり、赤ちゃんが脳性麻痺になったりという事故も起っているという。

母子共に異常なく出産が終っても、胎児に全く何の影響も及ぼさないということはないだろうと、恐ろしい気がした。

小説を書くというのは出産によく似ている。

十カ月、母親の胎内で胎児が成長している期間は、テーマが決まって取材したり、資料

を調べたりして、構想をねり、発酵させている期間で、いざ筆をとって書いている期間よりも概ね長いし、書けなくて無意識にうなっている自分の声に気づくと、陣痛を思い浮べてしまう。

優秀な助産婦さんに助けられて

私の出産の場合、長男の時は都心の著名な産院に入院したが、長女は長篇を書き上げてしまおう、と無理をしたのがたたって早産だったため、病院に行くのが間に合わず、近くの助産婦さんに取り上げて貰った。

産院では、陣痛の間隔がかなり短くなって病室から産室へ移されたが、看護婦さんが時時様子を見に来るだけで、出産間際まで誰もいない部屋のベッドに置かれていた。出産時には、医師や看護婦さんらが何人も周囲にいたようだが、ひどく孤独で、心細かった。

それにひきかえ、わが家に駆けつけて来た小太りの中年の助産婦さんは、自分の手を私につかませ、掛け声をかけて励まし、苦しい時は一緒にうなり、無事出産を終えたときは暑い季節でもないのに汗みずくになっていた。

疲れ切った産婦を、偉かった、偉かった、とねぎらい、未熟児で皺だらけの赤ん坊を、

可愛いきれいなお嬢ちゃんだ、と褒めちぎった。手術が必要な異常が生じた時は、設備やスタッフの整った病院で出産するのが安心だが、産院でお世話になった方たちの顔は覚えていないのに、一緒になってうなったり、汗みずくになって産ませてくれた助産婦さんの顔は、今でも忘れない。

小説を書く時の助産婦にあたるのが編集者で、作家たちはどれほど編集者を頼りに思っているかしれない。怠惰で、自信のない私は、タイミングのいい催促や、熱心な励ましや、適切なアドバイスなどを心頼みに今日まで書いてきた。

書いている時は、担当者の顔しか浮ばない。雑誌に書いているのでも、出版社に書いているのでもなく、担当者のために書くのである。子供っぽいと笑われるだろうが、担当者に褒めて貰いたくて書くのである。掛け声をかけ、一緒に汗を流してくれた編集者に、喜んで貰いたいと思って書くのである。

長篇の連載になると、二人三脚のような感が深くなる。だから、人事異動などで担当者が変るのが一番困る。

陣痛促進剤のように、誰が点滴を行っても、出産がうながされるというわけにはいかないのだ。

定年のない仕事

商業誌には締切があって、一旦引き受けたからには乏しい才能を振りしぼって書かなくてはならないのがつらいと書いたが、締切のない同人雑誌は、書こうが書くまいが本人の意志次第で、書かなくても、誰も文句を言う人がないのだから、怠惰になればとめどなく怠惰に流れるのが恐ろしい。

くじける気持を叱咤激励してふるい立たせてくれる編集者もいないし、漸く書き上げて活字にしても、誰の目に触れるかわからない。

まれに、同人雑誌評で取り上げられても、全国に数え切れぬほどの同人雑誌があり、その程度の力量の人はいくらでもいる。書いても書いても認められず、夫は、壜の中に手紙を入れて海に流すようなものだ、と言うが、壜の手紙はいつか人に拾われることもある。私は波打際の砂地に文字を書いているような空しさに屢々おちいった。

いま、三十年若返らせてやると言われても、私はやはり小説を書くだろうし、もう一度あれを繰り返すくらいなら、若返らせて貰わないほうがいい。

サラリーマンの定年が延びているが、それでもそろそろ友人や友人の夫たちに定年を迎

える人が出てきた。大概再就職して、数年勤めるようだが、やがてはそれも終る時がくる。

作家は定年がなくていいと言われる。現に定年を遥かに過ぎた年で、意欲的な仕事をしている作家が多い。男性よりも女性のほうが寿命が長いこともあってか、女流作家は更に元気である。野上彌生子氏の九十九歳は異例としても、私など女流文学者会へ行けばまだ若手のほうで、後輩よりも先輩のほうがずっと多いのである。

定年がないということはいいことのようだが、これから死ぬまで書き続けるのは大変だ、と思うようになった。

定年退職なら自分でも気持にきりがつき、世間でも認めるが、作家の場合死ぬまで作家だから、こんなに寿命が延びると頭も体力も衰えるのは必定で、それに、やはり書くことがなくなるのが不安でならない。

私の引き出し

小説は、誰にでも自分のことを一作は書けるというが、一人の人間が体験することには限りがあり、私小説を書いていたのでは忽ち行き詰る。フィクションを書くには、常にアンテナを張っていなければならない。アンテナに触れたことは、小説になるかならないか、

その段階ではわからないが、メモをしておかないと、私などは記憶力が乏しいからすぐ忘れてしまう。

外出先でふと思いついたら、手帳を持っていないときはレストランならレシートに、料理屋なら箸袋に、喫茶店なら紙ナプキンやマッチなどに書きとめておく。

すっかりそのことを忘れていて、二、三日してからハンドバッグの中のメモに気づくことがあるが、それを改めていつも使っている予定表の一番後のページに書き込んでおく。それが私の引き出しである。

予定表は、多くの作家が愛用している浅草の原稿用紙屋さんが毎年お年賀にくれるもので、その店の原稿用紙を使うようになって十六年経つから、机の上の本立てには十六冊の予定表が立ててあり、その最後のページにはそれぞれ十から二十ぐらいのヒントが書いてある。

書きとめてはおいたが、創作意欲の全く湧かないものもあり、その中のいくつかが作品化されるが、その年には書かなくても、気にかかっているものは翌年また予定表の終りに書き込んでおく。一向に熟してこないものは、毎年新しい予定表が届く度に書き継いでゆくのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c